

# ロンドンオリンピック柔道競技報告

山田 利彦

了徳寺大学・教養教育センター

## 要旨

第30回オリンピック大会柔道競技が7月28日から8月3日までの7日間、ロンドンにて開催され、了徳寺学園より2名の選手が出場した。平岡拓晃が60kg級で、学園選手初となる銀メダルを獲得し、福見友子が48kg級で5位に入賞した。日本チーム全体では、金メダル1、銀メダル3、銅メダル3個という厳しい結果となった。北京オリンピック以後、世界ランキング制度導入など、大きな変革の波が押し寄せ、様々な面で日本柔道が十分に対応できなかったことが今回の結果につながったように思われる。次回のオリンピックに向けて、強化の当事者の1人としても、金メダル獲得目指して努力していきたい。

キーワード 柔道, ロンドンオリンピック, ランキング, 了徳寺学園柔道部

## A Report on Judo in The London Olympic Games

Toshihiko Yamada

The Department of Judotherapy and Sports Medicine, Faculty of Health Science, Ryotokuji University

### Abstract

The 30th Olympic Games Judo competition started on July 28 in London, for 7 days, until August 3, with two players from Ryotokuji Judo Team participating. Hiroaki Hiraoka won the silver medal in 60 kg category, which was the first medal for Ryotokuji Judo Team and Tomoko Fukumi finished as the fifth in 48 kg category. The Japanese Judo team won one gold, three silver, and three bronze medals in total. This result was very disappointing for Japanese Judo. After the Beijing Olympics, a wave of change such as the world ranking system was introduced, and the result in the London Olympics seemed to be caused by the fact that Japanese judo was not able to cope sufficiently with the change that Japanese Judo was not able to cope enough.

As one of the coaching staffs, I would like to make an effort to accomplish the gold medal at the next Olympics.

Key Words : Judo, London Olympic Games, Ranking, Ryotokuji Judo Team

### I. はじめに

第30回夏季オリンピック競技大会が、過去最多の3度目となるイギリス、ロンドンにて盛大に開催された。柔道競技は総合開会式翌日となる7月28日から8月3日までの7日間、ロンドン郊外にあるエクセル展覧会センターにて行われた。今大会へ日本代表として、了徳寺学園柔道部より、男子60kg級に北京オリンピックに続いて2大会連続となる平岡拓晃、女子48kg級に福見友子の2名が出場した。

## II. 出場選手内訳

12回目を数えるロンドンオリンピックでの柔道競技へは、これまでの最多参加国数であった2004年アテネ五輪の94を大きく上回る、135の国と地域（18の国と地域からの招待国を含む）から、男子233名、女子154名の計387名が参加した。表1にあるようにヨーロッパからの出場選手が約半数を占めており、加盟国数における参加国の割合を見ても84%と他の大陸連盟に比べて非常に高い数値を示している。こうした状況からも、現在の柔道活動の中心が、欧州を基盤としていることが読み取れる。欧州に続いて、アジア、パンアメリカ、アフリカ、オセアニアの順であり、オセアニア諸国からの出場はわずか4%に止まり、柔道小国が多く、財政上、国際大会等への派遣に窮しているオセアニアの現状を表している。

表1 出場国数及び出場選手数の大陸別内訳

大陸連盟	参加国数	加盟国数	加盟国数における 参加国の割合	参加選手数	大陸別割合
アフリカ	30	50	60%	41	11%
ヨーロッパ	42	50	84%	182	47%
アジア	26	39	67%	83	21%
オセアニア	11	20	55%	16	4%
パンアメリカ	26	41	63%	65	17%
合計	135	200	68%	387	100%

※ルワンダの選手1名をアフリカ、キュラソー島の選手1名をパンアメリカに組み入れて算出

## III. 国際ランキングシステム

2009年1月より、各種大会ごとに国際柔道連盟が格付けしたポイント制度(表2)により、成績が得点化され、その合計点を競う世界ランキングシステムが導入された。ランキングポイントに加算できるのは、獲得したポイントの高い方から年間5大会までの得点と、前年に獲得した上位5大会での得点の50%である。

このランキングの順位により、各種大会時のシード順位が決められ、2010年5月7日から2012年4月30日までの点数により、男子は上位22名、女子は上位14名がオリンピック出場権を獲得出来る。(1カ国より各階級1名のみ)このリストに入らなかった選手は、大陸ごとに割り当てられた出場枠を全階級の選手を含めたランキングポイント上位者から振り分けられ、各国各階級最大1名までが大陸枠による出場権を獲得できる。またこの他に開催国に男女7階級ずつの出場枠が与えられ、これに前述の招待枠(ワイルドカード)により、出場者が決定される。北京オリンピックまでは出場権獲得が、前年の世界選手権や同年の大陸選手権での結果による一発勝負の選考であった。しかし今回のようにランキング上位者に振り分けられたことは、番狂わせが少なく、実力のある選手が出場権を獲得しやすい意味でもよく考えられた制度であると思われる。しかしそれは前述の通り、欧州各国やアジア、パンアメリカの一部の柔道大国にとっては非常に有利ではあるものの、金銭的負担から国際大会への派遣に窮している国々の選手にとっては非常に厳しい制度である。また、多くのポイント大会がヨーロッパで開催されている為、ヨーロッパの国々とそれ以外の国々との条件に大きな差がみられることも、今後検討されるべき事案と思われる。(表3)

表2 各種大会のポイント配分表

	ワールドカップ	大陸	グランプリ	グランドスラム	マスターズ	世界	五輪
1位	100	180	200	300	400	500	600
2位	60	108	120	180	240	300	360
3位	40	72	80	120	160	200	240
5位	20	36	40	60	80	100	120
7位	16	28				80	96
ベスト16	12	20	24	36		60	72
ベスト32	8	12	16	24		40	48
初戦突破	4	8	8	12		20	24
参加		2				4	

表3 2010年5月～2012年4月までの各種大会開催の大陸別開催数

開催大陸	ワールドカップ		グランプリ		グランドスラム		マスターズ		大陸選手権		世界選手権		全体	
	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合	回数	割合
アフリカ	1	3%	1	10%	0	0%	0	0%	2	20%	0	0%	4	6%
ヨーロッパ	14	44%	5	50%	4	50%	1	50%	2	20%	1	50%	27	42%
アジア	7	22%	4	40%	2	25%	1	50%	2	20%	1	50%	17	27%
オセアニア	2	6%	0	0%	0	0%	0	0%	2	20%	0	0%	4	6%
パンアメリカ	8	25%	0	0%	2	25%	0	0%	2	20%	0	0%	12	19%
計	32	100%	10	100%	8	100%	2	100%	10	100%	2	100%	64	100%

#### IV. 会場

大会はエクセル展覧会センター(英語表記: ExCeL London)にて開催された(写真1)。この会場では柔道の他に、卓球、ボクシング、フェンシング、テコンドー、レスリング、ウェイトリフティングが行われた。大会会場への入場の際に、厳重なセキュリティチェックが行われることはこうした世界的イベントではスタンダードになっており、前回の北京五輪の際には、チェックに時間がかかり過ぎて序盤戦に間に合わないなどの混乱が生じた。今回は、前回と違い、複数の競技が同じ建物の中で同時に行われる事から更なる混乱も予想された。しかし観客の導線については特に考慮されており、入場の際にはカスタムハウス駅、退場には隣のプリンスリージェント駅のみを利用するよう設計されており、またセキュリティチェックのレーン数(写真2)も十分な数が用意されていたことから、大きな混乱は無かった。試合は予選ラウンド(1回戦から準決勝まで)と決勝ラウンド(準決勝、敗者復活最終戦、3位決定戦、決勝)に分けて行われた。



写真1 エクセル展覧会センター



写真2 セキュリティーチェックレーン



写真3 試合場

## V. 試合

大会は初日に男女の最軽量階級である、60kg級と48kg 級が行われ、それぞれの階級に了徳寺学園所属の平岡拓晃、福見友子の両名が出場した。

平岡は、前回の北京オリンピックにて4連覇を目指す野村忠宏を抑えて出場したものの、怪我の影響も有り、初戦敗退という悔いの残る結果となった。北京五輪の試合が終わった日の夜、この屈辱を晴らすのは同じ五輪の舞台でしかないと共に誓い合い、ロンドンの畳の上での雪辱を目指して戦い続けてきた4年間であった。北京五輪翌年の世界選手権から銀、銅、銀と3大会連続で結果を残し、多くの怪我と戦いながらもようやく、5月の最終選考会にて大会5連覇と共に、ロンドンへの切符をつかみ取った。代表決定後、試合までは大きな怪我もなく、順調に調整も進み、試合当日を迎えた。初戦は地元イギリスの大歓声を背に戦う、2010年の欧州23歳以下チャンピオンのマッケンジーとの試合となった。身体能力が高く、一発がある相手で、初戦で戦うには難しい相手であった。しかしこの日の平岡は4年間の思いを爆発するかのごとく、序盤から攻め続けた。得意の小内刈で技有を奪った後も攻撃の手を緩めず、最後は豪快な背負投で一本を奪い、素晴らしい立ち上がりを送った。続く3回戦は国際大会での入賞経験豊富なモーレン(オランダ)との対戦が予想されたが、イスラエルのアルシャンスキーが勝ち上がり、平岡と相対した。この試合でも平岡は持ち味のスピードを駆使した素早い動きで相手を翻弄し、一本背負投による技有に加えて有効も2つ奪い、危なげなく準々決勝に進出した。ここでフランス期待の若手、2010年欧州王者のミロスとの対戦をむかえた。この試合ではなかなか平岡の組み手になれず、相手に先に技を出される苦しい展開となった。終盤には2度目の指導により有効ポイントをリードされ、後がなくなる。挽回せんと攻め立てるもののポイントを奪うまでには至らず、残り時間僅かとなる。ここで大会に向けて準備していた間合いをつめてからの攻撃が効を奏し、有効を返して、勝負は延長戦へ突入する。延長戦では一度平岡の小内刈が決まったと思われたが、ジュリー(審判委員)の判断により取り消しとなり、勝負はそのまま判定に委ねられ、終始攻め続けた平岡に3本揃った。絶体絶命の状況ではあったが、平岡の4年分の思い・執念がこの逆転劇につながったように思う。続く準決勝では、この日好調のイタリア・バルデとの対戦となり、開始早々に一本背負投で技有を奪い、そのまま攻撃の手を緩めることなく、得意の小内巻込で豪快に相手を畳に叩きつけ、いよいよ悲願に向けて決勝戦を残すのみとなった。決勝では世界選手権を連覇していた王者ソビロフ(ウズベキスタン)を準決勝で下した、ロシアのガルスチャンとの対戦となった。1月のワールドマスターズでも、ソビロフ、平岡を下して優勝しているガルスチャンは、09年世界王者のザンタラヤ(ウクライナ)を含めた4強と評される選手の中で、現在、最も勢いのある選手であった。決勝では開始早々にガルスチャンの内股をかわして掬投の態勢となり、そこから持ち上げようと更に踏み込んだところを払巻込に変化され、悲願の金メダル獲得には後一步届かなかった。決勝で敗れはしたが、勝負に出た結果であり、この

日の平岡はまさに執念を持って堂々と戦い、4年間の思いを十二分に発揮したように思う。(写真4)



写真4 銀メダルの平岡拓晃選手

福見は、五輪への出場権獲得は非常に厳しい状況の中、最後まであきらめず、ワールドマスターズ、グランドスラムパリ、そして最終選考会と全ての試合で優勝し、土壇場での逆転劇でロンドンへの切符を獲得した。北京五輪前年の世界選手権最終選考会で勝利しながら、世界への切符を手にすることができず、オリンピックへの道を選考と実績により絶たれた福見は、ようやく自らの実績も考慮されるまでの成績を残し、代表権を手繰り寄せることに成功した。代表決定後から本番まで、ここ数年でも最高の仕上がりを見せ、

万全の状態で大大会当日を迎えた。福見は初戦からの登場となり、2009年の世界選手権決勝を争ったスペイン・ブランコとの対戦となった。試合は福見ペースで進むものの、ポイントを奪うまでには至らず、いきなりの延長戦突入となった。延長戦では相手が掛け潰れたところを送襟絞に極め、2回戦に駒を進めた。2回戦では地元イギリスのエドワーズと対戦し、この試合では巴投と縦四方固による合技で下し、準々決勝に進出する。準々決勝では、2010年世界選手権で先にポイントを連取され、逆転勝ちにて勝利した前回五輪3位のアルゼンチン・パレットとの対戦をむかえた。福見が技を掛けた後に合わせて、技に入ってくる相手に対して、福見も慎重に戦い、明確なポイントが奪えないまま、勝負はゴールデンスコアに突入する。延長でも技によるポイントは奪えなかったものの、終始福見がペースを握り、最後は相手に2度目の指導が宣告されて、準決勝に駒を進めた。準決勝では、前回大会覇者のルーマニア・ドゥミトルと対戦した。開始早々一度頭を下げられた場面で福見に指導が与えられ、挽回せんと少し強引に掛けた大外刈を返されてしまい、技有を先取される。そこから果敢に攻め続け、ポイントを守るべく勝負に出来ない相手に対して指導が2度与えられるも、後一步届かず、ここで無念の敗退となった。3位決定戦にまわった福見は、敗者復活戦を勝ち上がってきたハンガリー・クゼルノビツクと銅メダルを掛けての戦いとなった。ドゥミトルと共に変則柔道で一番警戒していた相手との対戦は先に指導を受ける苦しい戦いとなった。しかし徐々に福見がペースを握り、延長戦に入ってから捉えるのも時間の問題と思われたところで、一瞬相手に間合いを詰められ、小外掛をまともを受けてしまい、銅メダル獲得はならなかった。結果は非常に厳しいものに終わったが、ここまでの道のりにおける福見のひたむきな努力は、関係者のみならず、多くの人々に大きな感動を与えたものと思われる。こうして日本柔道は銀メダル1つを獲得して初日を終えた。(写真5)



写真5 5位入賞の福見友子選手

2日目は66kg級と52kg級が行われ、共に前年の世界チャンピオンである海老沼匡（パーク24）と中村美里（三井住友海上火災）が登場した。海老沼は接戦をものにして準々決勝に進出し、韓国のチェと対戦。この試合では韓国のチェが先に技を仕掛けてペースを握るものの、勝負は決め手に欠け、GSに突入する。延長戦中盤、海老沼が小内刈で有効を奪い、準決勝進出を決めたかと思われたが、平岡の時同様にジュリーによる訂正が入り、勝負はそのまま旗判定に委ねられる。旗判定は試合全般のチェの攻撃を評価したのか3本とも相手側に揃い、海老沼の敗退が決まった。しかしここで会場中のブーイングに触発されたかのようにジュリーからの指導がはいり、再度旗判定が行われ、今度は海老沼に3本揃うという前代未聞の結果となった。この一連の裁

定は、試合をさばいている審判員に権限が無いことを世界中にアピールする結果となり、柔道のスポーツとしての資質を自ら否定するような暴挙であった。日本の選手が当事者で、結果的に勝ったから良いという話しではなく、オリンピックという世界最高の舞台でこうした事態が起こった事は、現行の制度に大きな問題をはらんでいることを内外にアピールした結果となった。騒動の末に準決勝に進出した海老沼であったが、無名のシャブダトゥアシビリ（グルジア）に隅返で敗れ、3位決定戦にまわる。3位決定戦でもGSにもつれ込む接戦になったものの、最後は得意の釣腰を豪快にきめ、銅メダルを獲得する。準決勝からの戦いは若干勢いに欠けた感があり、準々決勝での一件が少なからず、その後の海老沼の精神面に影響したのではないかと思われる内容であった。

前回五輪3位の中村は、その際に敗れた北朝鮮のアンと2回戦で対峙するという組み合わせとなった。この試合が事実上の決勝戦ともいえる対戦で、その意味を知る会場も序盤戦でありながら早くもヒートアップしていた。試合は開始早々、アンが谷落で技有を先取る。その後、中村が有効を返し、アンに2度、指導が与えられるものの追いつくまでに至らず、中村の2度目の五輪挑戦は初戦で終わった。前日の福見、そしてこの日の中村と金メダル獲得が絶対視されていた二人の敗退は予想外であり、男子も世界王者の海老沼で金メダルを逃した事で、日本チームのメダル獲得計画は早くも大きな修正を余儀なくされた。

3日目は73kg 級と57kg 級が行われ、前年世界チャンピオンの中矢力（ALSOK）と2010年の世界王者・松本薫（フォーリーフジャパン）の両名が出場した。中矢は組み合わせにも恵まれ、順調に勝ち上がり、準決勝では判定にもつれ込む接戦になりながらも勝利し、決勝に駒を進めた。ここでロシアのイサエフと対戦し、終盤に払巻込で有効を奪われ、銀メダルに終わる。中矢らしく、勝負どころをものにして勝ち上がったものの、金メダルには後一步届かなかった。

松本は初戦から難敵との対戦が続いたが、持ち前の粘り強い柔道を発揮して、準決勝に進出する。準決勝では見せかけの技で攻勢点を稼ぐパヴィア（フランス）に主導権を握られるも、延長戦での一瞬のチャンスを逃がさず有効を奪い、決勝進出を決める。決勝では伏兵のカプリオリ（ルーマニア）と対戦し、延長戦での相手の反則により、ようやく日本に待望の金メダルをもたらした。大会3日目にして初の「君が代」が会場に流れ、男女共にメダルを獲得し、重苦しい雰囲気漂っていた日本チームに少しの光明が差したかに思われた。

大会も折り返しとなる4日目は81kg 級と63kg 級が行われ、若手の中井貴裕（流通経済大学4年）とベテラン上野順恵（三井住友海上火災）が登場。中井は持ち前の積極性で準々決勝まで勝ち上がるも、ここで前回王者ビショフ（ドイツ）と対戦し、腕挫十字固に極められ敗退する。敗者復活最終戦で強豪ギユレイロ（ブラジル）には勝利したものの、3位決定戦では2009年世界王者のニフォントフ（ロシア）に合技で敗れ、メダル獲得はならなかった。

上野は序盤から動きが硬く、準々決勝で以前不覚を取ったことのある韓国のジョンに攻勢を許し、指導2を受けて敗れ、敗者復活戦にまわる。ここから上野が粘り強く戦い、決して本調子ではなかったものの、2試合をものにして、銅メダルを獲得した。中井、上野共に、現時点での力は全て出し切った結果であったように思う。しかし合宿段階から疲れが明確に見受けられていた上野に対する大会に向けてのコンディショニングについては、改善の余地を強く感じた。

5日目は90kg 級と70kg 級が行われ、世界の舞台への初挑戦となる西山将士（新日本製鉄）とグランドスラムバリを制した田知本遥（東海大学4年）が畳に上がった。西山は持ち前の粘り強さを駆使して勝ち上がるも、準々決勝で韓国のソンに技有と有効を先取され、窮地に絶たされる。ここで起死回生の大外刈をきめ、一本が宣告されて大逆転かと思われたが、ジュリーの訂正により技有へと変更され、ここで涙を呑む。気を取り直

して敗者復活戦2試合を共に延長による旗判定でものにし、西山らしい粘りの柔道で銅メダルを獲得した。準々決勝で相手のポイントを最初の技有だけにくい止めていれば、更に良い色のメダル獲得も可能と思われただけに惜しい結果となった。

若い田知本は、準々決勝でリードしながらポイントを返されて延長にもつれ込み、僅差の判定で敗れて、敗者復活戦にまわる。最終戦では前の試合で痛めた肘の影響により、自分の柔道が出来ないまま指導2で敗れ、五輪初挑戦は苦い結果となった。男子はここまでメダル4個と前回大会の2個を上回っているものの、金メダルはなく、6日目の穴井へ更なる重圧がかかる状況となった。女子も若手の勢いに掛けたものの、不運も重なってメダルに届かず、状況は更に厳しいものとなった。

大会も残すところ2日となった6日目には100kg級と78kg級が行われた。男子は大黒柱・穴井隆将（天理大職員）、女子は世界選手権2大会連続でメダルを獲得している緒方亜香里（筑波大学4年）が登場した。穴井は初戦から明らかに動きに硬さが見られる中、地元オースティン（イギリス）を破り、2回戦で前年の世界3位のクレパレック（チェコ）との対戦をむかえる。序盤は、硬さも取れたように見えた穴井が攻勢を取り、相手に指導が与えられる。しかしその後、技を掛けて潰れたところを相手の注文通りの形で抑え込まれてしまい、2回戦で姿を消した。敗者復活戦にもまわれず、いよいよ日本男子の金メダルゼロが頭をよぎる結果となった。

緒方は初戦から強敵との対戦をむかえる。2010年アジア大会決勝で不覚を取った韓国ジョンとの初戦は、厳しい戦いとなったが指導2で退け、2回戦で2009年世界王者のベルケルク（オランダ）と対戦する。この試合では緒方が先に大外刈で有効を奪い、小内刈で有効を返されるも、再度小外刈で有効を奪ってリードする。このまま押し切るかと思われた残り25秒、相手の一本背負投による技有を許し、ここで力尽きた。持ち前の積極性を駆使して攻める緒方らしい試合振りではあったが、勝利の女神は緒方に微笑まなかった。こうして男子はメダル4個ながらも金メダルゼロ、そして女子は金メダルを獲得するもメダル数としては近年では最低となる2個のみで大会最終日をむかえる事となった。

熱戦が続くオリンピックもいよいよ7日目となる最終日を迎え、100kg 超級に上川大樹、78kg 超級に杉本美香の両名が出場した。2010年に無差別級で世界チャンピオンに輝いた上川だが、その後はなかなか結果を残すことができず、苦しい戦いが続いていた。その上川に日本男子柔道最後の砦として金メダル獲得を期待したが、残念ながら2回戦で敗れ、早々に姿を消した。自分の組み手になれば、投げる力は持っているのだが、相手もそのことは分かっており、自分の形に成れないままでの敗戦で、日本男子柔道の金メダル無しの瞬間はあっけなく訪れてしまった。

女子の杉本は序盤から持ち味である技の切れを発揮して勝ち上がり、順調に準決勝に進出する。準決勝では地元の大声援を受けるブライアントと対戦し、指導2で退けて、決勝に駒を進める。決勝では北京五輪チャンピオンのトンとの対戦が予想されたが、キューバのオルティスがトンを下し、両名が決勝で相見えた。決勝では杉本が、相手の返し技を意識してかそれまでの思い切りが影を潜め、攻めが単調になってしまう。勝負は延長戦でも決着がつかず、最後は旗判定に委ねられ、3-0でオルティスに軍配が上がった。これまで勝利したことの無かったトンが準決勝で姿を消し、杉本に風が吹いたかに思われたが、金メダルに後一步届かなかった。

こうして7日間に渡って繰り広げられた熱戦は幕を綴じた。日本男子は五輪史上初めてとなる金メダルゼロに終わり、女子もこれまでで最低となるメダル3個に終わった。日本で創設された柔道だが、現在、国際柔道連盟には加盟国数200を数えるまでに普及・定着しており、その結果が、表4にあるように今大会でのメダル分散につながっていると思われる。そうした現状の中、その競技の発祥地だというだけで、勝てるほど甘い状

況ではない。今回の結果は柔道の創設者・嘉納治五郎師範が当初より推進された世界への普及活動の成功を端的に示した結果であると思われる。しかしながら強化の面からすると、状況はどうか、結果が全てであり、今回の敗因をしっかりと検証する必要があることはいうまでも無い。そして次回ブラジル・リオデジャネイロで開催されるオリンピックに向けて、検証を元に、これまでの強化体制、強化方法等についても大胆な改革が強く望まれる。

表4 ロンドンオリンピックメダル獲得国

	国名	金メダル	銀メダル	銅メダル	総メダル数
1	ロシア	3	1	1	5
2	フランス	2	0	5	7
3	韓国	2	0	1	3
4	日本	1	3	3	7
5	キューバ	1	2	0	3
6	ブラジル	1	0	3	4
7	アメリカ	1	0	1	2
8	スロベニア	1	0	0	1
9	グルジア	1	0	0	1
9	北朝鮮	1	0	0	1
11	ドイツ	0	2	2	4
12	ルーマニア	0	2	0	2
13	ハンガリー	0	1	1	2
14	中国	0	1	1	2
15	モンゴル	0	1	1	2
16	イギリス	0	1	1	2
17	オランダ	0	0	2	2
18	イタリア	0	0	1	1
19	ウズベキスタン	0	0	1	1
20	ベルギー	0	0	1	1
21	カナダ	0	0	1	1
21	コロンビア	0	0	1	1
21	ギリシャ	0	0	1	1
	国数	10	9	18	24

## VI. 審判

前述通り、66kg 級での判定が覆されるケースを筆頭に、今大会でのジュリーによる判定への干渉が非常に多く見られた。その都度、試合が中断され、ビデオによる確認後、審判員には意見を言う機会も与えられずに判定が変更されることが頻繁に行われた。熱戦に水を差すだけでなく、一番間近で試合を見ている3名の審判員の意見が軽視される状況は非常に異様な光景であったように思う。ビデオによる判定はその導入のきっかけとなった、シドニーオリンピック100kg 超級決勝での篠原・ドゥイエ戦のような、どちらのポイントか審判が判別出来ない、或いは意見が分かれる場合などに活用されるべきであり、全てのポイントの高低に対しても変更を求める現在のやり方では、審判員の存在にすら疑問を投げかけるものになってしまう。まずは審判

の判断を尊重し、判定に対して疑義が生じる際は、レスリングなどが導入しているコーチからのアピールにより、ビデオによる再チェックが行われる制度等への転換が望まれる。

## Ⅶ. おわりに

北京オリンピックからロンドンオリンピックまでの4年間、世界の柔道界には大きな変革の波が押し寄せた。前述した世界ランキング制度の導入による試合数の激増、世界選手権の毎年開催と各国各階級2名代表枠への増加、また直接足への攻撃の禁止やジュリー制度の運用拡大など、ルールや制度が大きく様変わりし、それらに翻弄されながらの4年間であったように思う。しかしながら選手たちはそうした状況下の中で必死に戦い、各自の人生を賭して4年に一度の大舞台に臨んだ。結果は既に述べたが、今回の結果はこうした変革に日本柔道界が上手く適応出来なかったことが一番の原因ではないかと思われる。個人競技であるが故に、兎角敗戦の責任は選手個人に全て降りかかってしまいがちだが、連盟、強化スタッフ、所属の指導者、そして選手それぞれが一体となって同じ目標に向かっていける体制の構築が日本柔道のリオデジャネイロでの雪辱に不可欠であると考え。その当事者としても責任を痛感しつつ、次に向かって努力していく所存である。また了徳寺学園柔道部として2度目となるオリンピック挑戦で、初めてメダルを獲得することが出来た。これも常日頃よりご指導いただいている了徳寺健二理事長をはじめとする、学園・大学関係者のご指導、ご支援の賜物であると考え。ようやく五輪の歴史に歩みを刻むことができたことを誇りにすると共に、関係者の悲願である金メダル獲得に向けて更なる精進に励みたい。

(平成24年11月28日稿)

査読終了年月日 平成24年12月21日